障がいのある子どもの親が抱える不安について

立野　優希　（生涯スポーツ学科　地域スポーツコース）
指導教員　中道　莉央

キーワード：障がい，親，不安，就労

1．緒言

紫藤・松田（2010）によれば，知的障がい児の親は子どもの自立，社会の障がい理解（偏見），親の加齢，社会保障制度，親亡き後の子どもの生活等，多岐にわたる不安を抱えていることが指摘されている．しかしながら，松本ら（2007）によれば，両親は地域のなかで近所の人達から手助けを受けたり相談したり環境にあるとは感じていない状況がある．

そこで本研究では，このような状況の解決策に資する知見を得るために，障がいのある子どもの親が抱える葛藤や不安，社会に求めるニーズを明らかにすることを目的とする．

2．研究方法

インタビューとアンケートの2種類の調査を行った．インタビューは障がいのある20歳の子どもを持つ40代の母親2名に実施した．さらに障がいのある子どもを持つ親の不安のうち，特に就労に着目して，滋賀県K養護学校の小学／中等／高等部に通う子どもの30～50代の母親10名を対象にアンケートを行った．調査期間はいずれも2017年10～11月である．

3．結果と考察

障がいのある子どもを持つ親の葛藤は子どもの障がい受容から始まり，不安は就労・情報・自立の不安が大きいことがわかった．

就労については，障がい者雇用問題の改善がされつつあると感じているが，「職業訓練として朝9時から夕方4時まで百均の製品をずっと作ってたんですけど（中略），袋に入ってる千円か2千円を見たときに現実を実感した．聞いてたけど，やっぱりそうなんやって涙が出ましたね」と語っており，雇用率と賃金を含む職場環境を憂いでいる現状が明らかとなった．

情報については，「全然ですね，知ろうとしてないのかも．私たちも必死で」と述べており，非常に乏しい情報量の中で不安と向き合う姿が明らかとなった．これを解決するためには制度を母親のもとにまで正しく伝える情報伝達経路を構築したり，専門家が積極的に関与したりする必要があろう（紫藤・松田，2010）．

自立について，子どもの自立には経済的自立よりも生きる力として人から助けてもらうためのコミュニケーション能力が重要であると考えていた．子どもの障がいに様々な不安を抱えながらも，「変やけど私があの子に頼ってるのかもしれない．生きる意味はあの子」と語る等，親にとっても障がいのある子どもの存在が生きる糧となり，将来を悲観するだけでなく子どもの成長に希望を持つ姿も確認された．

4．まとめ

障がいのある子を持つ親が抱える不安の中で，特に先行研究であまり検討されてこなかった就労について明らかにすることができた．今回は母親のみを対象としたので，今後は父親や周囲の人を対象とし，障がいのある子どもやその親を支える地域や社会のあり方についてさらに知見を深めていきたい．

主な引用・参考文献
紫藤恵美・松田修（2009）知的障害児の母親の将来不安に関する研究．東京学芸大学紀要 総合教育科学系，61(1)：205-212.
松本耕二・豊山大和・三原博光（2007）地域における知的障害児の両親の育児意識と社会心理的状況．山口県立大学社会福祉学部紀要，13：131-138.